

目次

序	一
自序	三

第一篇 開戦の経緯

第一章 歴史的展望

1 明治大正時代	2
明治維新—富国強兵 日本とアジア大陸 第一次大戦後の列強の対日圧迫 中国の排日運動—満洲事変勃発	2
2 満洲事変	4
事変の発端及び契機と関東軍 国際連盟介入と事変の拡大 満洲建国 国際連盟脱退 塘沽停戦協定—兵火終熄 日満不可分関係 日満共同防衛の対象—ソ連日独防共協定 赤化の防壁	4
3 支那事変	6
悲劇の序幕 国際経済の重圧 綏遠事件 西安事件—国共合作—抗日民族戦線 蘆溝橋事件と支那駐屯軍不拡大方針 北支事変より支那事変へ—全面問題 支那事変処理根本方針 日支新関係調整方針—近衛声明 汪兆銘の出馬と新中央政府樹立 国内体制の整備 支那事変を繞る列国の動静	10
4 ルーズベルトの隔離政策宣言 九国条約会議 米英の対日経済圧迫及び援蔣政策 日英会談—日米通商航海条約の破棄 日本への対ソ態度と国境紛争事件 日独同	10

盟交渉と平沼内閣 欧洲情勢の急転

第二章 第二次近衛内閣の登場と新国策の決定

1 第二次近衛内閣の登場	14
日本の政治情勢と欧洲戦局の進展 南方問題の抬頭—有田声明 近衛新政治体制運動 畑陸相の单独辞職 画期的新政策	14
2 日本への転機 近衛首相ラジオ放送「大命を拝して」 「基本国策要綱」 「世界情勢の推移に伴ふ時局処理要綱」 「時局処理要綱」の提案	16
3 新政策の意義	21
新政策の意図するもの 南方作戦研究に着手 対米英破局の萌芽	21
第三章 日独伊三国条約の締結	23
1 同盟の主なる対象の変遷	23
陸軍の態度及び主張 防共より同盟への経過 ソ連より米国対象へ	23
2 松岡・スターマー会談	24
日独伊枢軸強化に関する四相会議 会談の結論—廟議決定 当時の英本土	24
3 御前会議	25
討議の内容 海軍の要望	25
4 条約の成立とその後の発展	30

条約の全文 詔書渙発、内閣告諭、首相放送 日独阿
外相間の秘密交換公文 モロトフ訪独―独ソ交渉ヒ
ットラーの対ソ戦秘密命令下達 同盟の性格―政治協
定

第四章 支那事変解決の努力

- 1 北部仏印進駐 33
仏印の軍事的価値―援蔣ルート遮断 松岡・アンリー
協定 第五師団越境事件 仏印の遷延態度と四相会議
進駐経過 東條陸相の間責人事 南進の第一歩―米英
の反応
- 2 対華長期戦態勢への転移 35
新国交調整―阿部全權大使 「日華基本条約案」及び
「支那事変処理要綱」 支那事変処理要綱 提案理由
説明 大本営政府連絡懇談会 新国民政府承認―日滿
華共同宣言 ルーズベルト三選―一億弗援蔣借款供与
国内体制の強化 41
新体制準備会―政党解消 大政翼賛運動―大政翼賛会
の誕生 大政翼賛会実践要綱 紀元二千六百年式典
「経済新体制要綱」 大政翼賛会の性格論議

第五章 対南方施策の進展

- 1 対蘭印施策 43
蘭印の石油 小林商相、芳沢大使特派 蘭印の態度
対仏印、泰施策 44
浮動する対仏印、泰関係 仏印・泰国境紛争―南方問
題具体化 大本営の狙い―軍事基地獲得 紛争調停措
置の推移 海軍の情勢判断 調停会談開始 「対仏印・

泰施策要綱」 「要綱」決定の経緯―松岡外相との調
整 上奏、御裁可 調停会談成立と松岡外相 外相訪
欧 鹿島立ち

3 「時局処理要綱」の清算

一般情勢 英蘭、英米不可分論―陸海軍間の研究討議
陸軍の物的国力判断 「対南方施策要綱」 運命の岐
路―仏印、泰の軍事基地

第六章 日米交渉の開始

- 1 事前工作 54
野村大使起用 野村大使への訓令 岩畔大佐特派 近
衛首相の裏面工作―日米諒解案 ハル四原則
- 2 日ソ中立条約 55
外相訪欧計画―「対独伊ソ交渉案要綱」 対ソ国交調
整と陸海軍 外相提案討議―滞欧折衝 日ソ中立条
約締結 条約と独伊 対米国交調整の伏線 松岡・ス
タインハルト会談
- 3 日米諒解案の到着 59
日米諒解案全文 電撃的成立の希望と困難性の伏在
陸海軍の態度 米国の真意
- 4 松岡外相帰朝後の折衝 63
外相の訪欧報告 外相の態度―修正意見 第一次修正
提案 外相先ず独伊に内報 岩畔報告―交渉開始訓令
發電 独伊との調整 交渉の急速成立失敗―米国硬化

第七章 南部仏印進駐

運命の一石

1 南方情勢の悪化

重慶抗戦意志昂揚 ABCD包囲陣 仏印の非協力
日蘭交渉難航 外相の爆弾動議

68

2 南部仏印進駐決定の経緯

統帥部の焦慮、対米情勢判断 「南方施策促進に関する件」 陸海軍、松岡外相論争 永野総長の強硬論に杉山総長の疑惑 外相進駐に難色 外相漸く同意―独ソ開戦の日 「南方施策促進に関する件」上奏裁可 独ソ開戦と最後の論争―外相北進論 外相運命の予言

70

3 平和進駐

陸軍進駐準備 日仏交渉 交渉成立―進駐 米国の返礼―対日資産凍結

75

第八章 独ソ開戦に伴う新国策

1 大本営陸海軍部の討議

独ソ開戦情報―独事前通告なし? 陸軍部内論議―北進?南進? 陸軍の構想―準備陣 陸軍省の北進制肘 陸海軍調整 陸軍の独ソ戦推移判断 海軍の陸軍牽制 陸海軍部新国策案

76

76

2 松岡外相の対ソ開戦論

新国策討議 松岡外相の対ソ即時開戦論 新国策案修正決定 会而不議、議而不決

79

3 七月二日の御前会議

会議出席者 近衛首相説明 杉山參謀総長説明 永野軍令部総長説明 原枢府議長との質疑応答 国家機密

83

「新国策」クレムリンに通ず

4 関特演

陸軍未曾有の動員、集中 戦争決意なき作戦準備 第三次近衛内閣―「対ソ外交交渉要綱」 極東ソ軍無縁封止を繞る論争 対ソ措置決定―奉勅伝宣 「帝国陸軍作戦要綱」

85

第九章 対米英蘭戦争を辞せざる決意

1 松岡外相の退場

六月二十一日附米対案 ハルの「オールラステートメント」 連絡会議対案討議 松岡外相激怒 討議続行 日本側第二次修正提案 政変―松岡外相退陣 第三次近衛内閣―豊田外相登場 陸海軍既定方針確認要望

87

87

2 日本の苦悶

米英蘭の対日経済断交 陸海軍の苦悶 局地的解決案提案 近衛首相「日米巨頭会談」提唱 近衛メッセーじとルーズベルト・メッセーじ 泰問題に関する豊田・クレギー会談

94

3 「帝国国策遂行要領」の討議

陸海軍の折衝―海軍主動 戦争準備に関する陸海軍対立 陸海軍合意に達す 「帝国国策遂行要領」附議 提案理由説明―永野軍令部総長 重大修正―骨抜き 近衛首相の肚裏

97

4 九月六日の御前会議

会議前日の内奏、御下問 天皇の御不安―お叱りを受けた參謀総長 厳肅なる御前会議 総理陳述 軍令部

100

総長陳述 參謀総長陳述 企画院總裁陳述 原首相の
念押し 天皇異例の御発言

5 御前會議決定に基く政戦略の進展……………104

和戦決定の期限を画する日米交渉 日米首脳会谈実現
の努力―新提案 交渉の渋滞―第三次修正提案決定
豊田外相の修正提案取扱い措置 陸海軍の作戦準備促
進 陸軍決意前の作戦準備発令 和戦決定刮目待望

第十章 対米英蘭戦争決意……………107

1 東條内閣の出現……………107

陸海軍和戦決定を迫る 米覚書到着 陸軍方針決定
海相の真意不明 荻外莊五相會議 五相會議の申合
せ 恒例閣議席上陸相・外相論議 陸相総辭職進言
意外、東條に大命降下 時局と国民

2 国策の再検討……………112

東條内閣成立―陸海協力、国策白紙還元 初の連絡會
議―再検討要目決定 連絡會議連日―統帥部の焦慮
人造石油問題 対米交渉の見込み 国策遂行上の結論
三案 首相第三案への努力―陸軍省・部対立

3 深夜の激論―歴史的連絡會議……………114

昭和十七年度鉄配分決定 別案審議 臥薪嘗胆案検討
に入る 長期戦―外相蔵相の非戦論 戦機は今―軍令
部総長 第二、第三案一括検討―外相統帥部牽制 外
交打切り日時論争 打切り時、十二月一日零時と決
定 第三案具体化 外交条件討議 陸軍統帥部反対―
倒閣の危機―首相等の説得 第一、第三案比較検討
第三案基調「帝國国策遂行要領」決定 塚田參謀次長

悲痛なる所感開陳

4 十一月五日の御前會議……………121

二日首相委曲上奏 四日御前における軍事參議官會議
「国策遂行要領」原案通り採決 首相の提案理由説明
外相外交關係説明 企画院總裁の国力見透し 首相及
び枢相所見

第十一章 開戦の聖断……………125

1 平和への最後の努力……………125

来栖大使特派、甲案による折衝 来栖大使會談參加
野村大使意見具申 甲案断念―乙案最終案として提示
破局は近づく

2 併進する戦争準備……………127

南方軍及び南海支隊戰闘序列下令 聯合艦隊行動開始
臨時議會召集 「国策完遂決議案」全会一致可決
万事を決したハルノート

3 乙案妥結に伴う石油輸入量 ハルノート 米国の戦争 決意 快刀一閃、開戦即決 挑戦者は誰か……………129

4 開戦の聖断下る……………131

政府、重臣懇談會開催の真相 懇談の模様 十二月一
日の御前會議 首相開戦不可止論陳述 外相の結論的
所見陳述 軍令部総長所信披瀝 戦争終末への配慮
聖断下る 宣戰詔書案

5 対米交渉打切り通告……………135

東郷外相開戦第一日を初めて知る 企図秘匿エピソード
F 対米最後の覚書通告の経緯 大統領の親電

第二篇 開 戦

第一章 日本の統帥及び戦争指導機構

1 統帥機構	138
統帥権独立—国務との併立 帷幄上奏—軍部大臣の特 殊地位 大本营—陸海軍部併立	
2 戦争指導機構	139
大本营政府連絡会議 連絡会議と閣議 連絡会議の構 成と運営 四相会議、五相会議 最高戦争指導会議 御前会議 天皇と御前会議	

第二章 戦争計画の基礎的諸問題

1 国防方針、用兵綱領、年度作戦計画	143
国防方針と用兵綱領 最後の方針及び綱領 年度作戦 計画 支那事変以後の変貌	
2 戦争相手—米英蘭の可分不可分論	146
狙いは蘭印—英蘭一体、米英可分 米英不可分論 国 策再検討の結論—米英蘭不可分	
3 欧州戦局及びソ連の動向判断	148
独逸不敗の基本観念 日独伊協力の限界 ソ連の動向 —北方への備え	
4 南方攻略領域及び攻略順序	150
攻略領域決定—長期不败態勢確立 ラバウル、ニュー ギニア問題 右廻り? 左廻り? 同時奇襲?	
5 開戦時機	151

開戦時機決定の理由—三月説否決

6 敵国の軍事情勢

敵国軍の兵力配置及び戦力判断 日米戦力の比較

7 物理的国力の推移判断

国力の消長 船舶問題 船腹損耗の推定—和戦決定の
關鍵 物理的国力の見透し 臥薪嘗胆の場合の見透し

8 作戦の見透し

不敗の胸算 確算の根拠 長期戦と国防圏域 長期持
久戦略—米反攻様相判断

第三章 戦争指導計画

総合計画なし—陸海軍案	163
1 戦争目的	163
自存自衛と新秩序建設	
2 戦争終末促進に関する腹案	164
—対米英蘭戦争指導要領	
十一月十五日決定 戦争終結の極め手	
3 戦争経済基本方略	165
十一月十日決定 石油確保措置	
4 占領地行政実施計画	166
軍政施行決定—十一月二十日 陸海軍の軍政担任区分	
5 日独伊提携強化方策	167
対独伊措置決定—十一月十三日 単独不講和協定成立 軍事協定締結	
6 対泰施策	170
対泰施策の隠密準備 「対泰措置要領」 準備せる坪 上・ビボン協定案	

7 対和蘭措置……………172

蘭印上陸の時機と和蘭の取扱い 開戦直後の対和蘭措置

第四章 大本營の作戦計画……………174

陸海軍作戦計画の仕上げ 御前兵棋……………174

1 陸軍の作戦計画……………174

帝國陸軍全般作戦計画 陸軍最大関心—マレー上陸作戦 甲案決定と小沢海軍中将

2 海軍の作戦計画……………180

帝國海軍作戦方針 海軍最大の関心事—真珠湾攻撃 ハワイ奇襲の策案採用 機密保持

第五章 開戦時の日本陸海軍……………183

1 陸軍兵備……………183

兵備拡充の過程 南方作戦兵備

2 陸軍作戦資材の整備及び軍需工業……………184

軍需整備三箇年計画

3 教育訓練……………185

特色、重点、実情—地上、航空 南方作戦準備—台湾軍研究部 シンガポール攻略想定 陸海軍合同演習

航空部隊の訓練—落下傘部隊

4 陸軍の戦争発起態勢……………188

南方作戦部隊の戦闘序列 全陸軍部隊の状況 作戦準備に關する奉勅命令 南方要域攻略命令 陸海軍作戦

協定 南方作戦部隊十二月一日の態勢 開戦時の全兵力及び作戦資材の配置……………196

5 海軍兵備及び訓練……………196

兵備充実の推移 対米兵備の重点—海上艦隊決戦思想 教育訓練の実情……………198

6 海軍の戦争発起態勢……………198

作戦準備実施に關する奉勅命令 第一、第二開戦準備—展開配置完整 開戦時の聯合艦隊兵力配置 米英の対日判断……………207

第六章 戦争発起……………207

1 進攻作戦開始命令……………207

開戦日時決定の機微 開戦発令—矢は弦を離る

2 十二月八日……………209

杉坂少佐機事件 在外武官電—戦雲急 南方軍進発—風楼に満つ 緒戦快捷—詔書煥発……………212

3 「機密戦争日誌」戦争第一日……………212

第七章 ハワイ作戦—真珠湾攻撃……………213

1 作戦準備……………213

真珠湾攻撃の構想 聯合艦隊の攻撃命令 機動部隊の攻撃計画……………218

2 機動……………218

機動部隊出撃—北方航路 「新高山登れ」……………218

3 攻撃実施及び帰還……………218

奇襲成功 特別攻撃隊及び破壊隊の攻撃 帰投—勅語下賜……………218

4 奇襲成功の真因——ロバーツ委員会報告……………220

結論——在ハワイ米軍の怠慢と誤判 米軍首脳の奇襲防止処置 興味ある事実——天佑神助

第三篇 進攻作戦……………223

第二章 南方攻略作戦の初動……………224

1 南方軍及び聯合艦隊の指導……………224

南方軍の統帥発動 南方軍の作戦計画 南方攻略命令「寿甲第五号」発令 聯合艦隊の作戦要領 海軍南方部隊の作戦要領

2 対泰進駐……………229

進駐交渉開始時刻 ビボン首相の苦衷 第十五軍の進駐準備 ビボン行方不明——友好進駐成る 日泰同盟条約の締結

3 マレー作戦の発起……………232

マレー方面の敵情、気象 第二十五軍の作戦計画 上陸に関する軍命令 マレー作戦を貫く精神 第三飛行集団 海軍マレー部隊 奇襲上陸成功——我が領事館熟睡中 コタバル強襲——淡路山丸沈没 青木戦闘飛行団 英東洋艦隊の覆滅

4 プリンズ・オブ・ウェールズの出現 チャーチル首相の落胆……………239

比島作戦の発起……………240

正攻法の上陸作戦 作戦計画の一般構想 兵力部署の概要 分進合撃のための集中展開 濃霧航空撃滅戦を

利す 先遣部隊の上陸 軍主力比島上陸

第二章 中国方面の作戦……………246

1 香港攻略作戦……………246

開戦前の準備——前年来の懸案 香港要塞 攻略計画及び準備 「鷹」発令——「ハナサク」「ハナサク」 若林中尉の独断——一挙攻略 香港島攻略準備と降伏勧告 渡海攻撃——英軍白旗 香港占領地総督部

2 租界の処理と米英武力の掃蕩……………251

「中国に於ける対米英蔣措置」決定 十二月八日一斉に処理

3 開戦に伴う対重慶作戦……………252

第二次長沙作戦……………253

第三章 中南部太平洋方面攻略作戦……………253

1 グラム島の攻略……………253

南海支隊の任務——陸海軍現地協定 内南洋唯一の米基地覆滅

2 ウエーキ島の攻略……………255

第一次攻撃——失敗 第二次攻撃——苦戦の末占領

3 長駆ラバウルの攻略……………256

ラバウル作戦発動 南海支隊の行動 裁定——カビエソ、スルミ占領……………258

第四章 南方攻略作戦の進展……………258

一 シンガポールの攻略……………258

1	ベラク河に向う突進……………	259
	ジットラインの突破 航空基地の推進 軍作戦計画の修正 ベラク橋梁破壊	
2	ベラク河を渡河、クアラルンプールへ……………	259
	追撃部署 放胆な舟艇機動 スリムの殲滅戦 クワシタン飛行場の占領	
3	ジョホール水道への突進……………	261
	ゲマス突破 バクリの敵殲滅 シンガポール望見	
4	シンガポールの陥落……………	262
	攻撃準備 上陸―ブキテマの占領 敵我が軍門に降る―イエスカノーカ	
二	マニラの攻略……………	264
	マニラへの進撃 マニラか、バターンか―米西戦争の例 マニラの陥落	
三	ビルマ作戦……………	266
1	攻略の初動……………	266
	大本営の作戦構想 進攻準備 テナセリウムへの進攻	
2	ラングーンの陥落……………	267
	大本営の指導 ラングーン占領 戦略的意義	
3	中、北部ビルマの攻略……………	268
	南方軍の指導―全ビルマ作戦 マン会戦準備 マン会戦―要域わが有に帰す アンダマン、ニコバル諸島の攻略	
四	蘭印の攻略……………	270
1	作戦構想……………	270
	大本営の作戦構想 南方軍の指導―ジャワ攻略命令	

第十六軍の編組 第十六軍の作戦計画……………	272
2 ジャワ攻略の前哨戦……………	272
前哨戦の構想―ボルネオ守備軍新設 作戦開始―前方基地攻略 海軍及び航空部隊の活動	
3 ジャワ攻略作戦……………	273
兵要地理の概要 敵前上陸敢行―東西呼应 第二師団西部ジャワ攻略戦 東海林、坂口両支隊の戦闘 第四十八師団東部ジャワ攻略戦 ジャワ全土攻略成る	
4 パレンバンの攻略……………	275
攻略計画と空挺奇襲準備 挺進降下決行 地上部隊の策応と海軍部隊 南部スマトラ確保	
5 ジャワ沖海戦……………	276
スラバヤ沖海戦 バタビヤ沖海戦と退路遮断作戦	
五 バターン半島攻略戦……………	278
1 第一次攻撃……………	278
進撃準備―主戦力抽出せらる 追撃 戦闘交綏―恒広大隊潰滅 攻撃中止―大本営に報告 木村支隊左翼隊の奮戦	
2 第二次攻撃……………	280
陣地戦準備―兵力増強 攻撃準備部署と訓練 半島攻略計画―マツカーサー脱出 攻撃開始、第一陣地帯突破 攻略完遂 コレギドール要塞攻撃 無条件降伏	
第五章 攻略作戦終末に伴う戦争指導……………	283

1	進攻作戦の進展に伴う政略施策	283
	開戦時の対重慶判断 対重慶謀報路線の設定 当面の対外施策 東條首相の議会演説 チモール作戦に關連する対葡論争 爾後の戦争指導に關する研究議題	
2	世界情勢及び既得戦果の判断	286
	世界情勢判断 初期作戦の実績検討	
3	濠洲政略等に関する陸海軍の論争	291
	攻勢? 守勢?—濠洲政略論争 妥協の行方—米濠遮断作戦 米濠、英印濠關係の検討	
4	爾後の戦争指導大綱	294
	陸海軍調整案採択 趣旨不明確—根本的調整なし 説明、上奏 船腹増強対策 陸軍船解備問題	
第六章 外郭要地に対する作戦		297
	陸海軍戰略思想の対立	
1	セイロン島に対する航空進攻作戦	298
	海軍南方各部隊の攻撃	
2	ポートモレスビー海路政略作戦と珊瑚海海戦	299
	作戦の構想 海路政略作戦発動 海上決戦に転移 離脱、戦機を逸す	
3	フィジー、サモア、ニューカレドニア	301
	作戦の準備	
4	F・S作戦と第十七軍 F・S作戦延期 ミッドウェイ、アリニューシャン	302
	作戦決定の経緯 提案突如、陸軍妥協 聯合艦隊の決戦論 海軍部内	

論議、六月断行決定	
第七章 米機の本土来襲	
1	米機動部隊の出現と我が海軍の邀撃準備
	太平洋正面、本土防空の穴 触接と反撃
2	敵機の奇襲
	ミッドウェイ作戦を生む
3	浙贛作戦の発動
	作戦目的—大陸航空基地覆滅 支那派遣軍の作戦要領 作戦の終末
第八章 ミッドウェイの敗戦とアリニューシャンの攻	
略	
1	作戦地方面の状況
	敵艦隊の動静—作戦の鍵
2	ミッドウェイ、アリニューシャン作戦の構想
3	ミッドウェイ作戦の経過
	進撃開始—海軍記念日 戦機動くも敵情不明 ミッドウェイ空襲—運命の兵装転換 敵の先制第一撃—敵艦隊判明 一瞬遅し—大勢決す 飛竜独力奮戦—最後壮烈 避退行動と聯合艦隊 惨敗—不幸の連続
4	アリニューシャン要地政略作戦の経過
	出撃、反転、再興—アダック攻撃中止
5	海洋主動権の転移と敗戦の秘匿
	全戦局の転機—反省 敗戦秘匿の苦慮 機密戦争日誌の記事
第九章 防衛態勢の整備	

1 大本營の指導……………315

軍容の刷新 南方軍基本任務の更改 基本任務のための陸海軍協定 セイロン作戦準備要綱 大本營の真意—独伊東進に策応

2 南方占領地行政の滲透……………318

軍政実施の状況 軍政総監部の新設

3 陸軍の重慶進攻作戦構想……………320

作戦要領内示 五号作戦準備要綱示達

第四篇 米軍の反攻開始……………323

第一章 ガダルカナル島を中心とする南東太平洋の激闘……………324

1 ポートモレスビーに対する陸路進攻……………324

リ号研究作戦 大本營陸路進攻に決す 第八艦隊の新設 横山先遣隊の進撃 モレスビー攻略構想 南海支隊主力の進撃

2 ガダルカナル島に対する米軍の反攻開始……………327

ガダルカナル島—陸軍全然知らず 米軍の上陸開始 第八艦隊の反撃（第一次ソロモン海戦） 第十一航空艦隊と聯合艦隊 第十七軍の任務外増援処置

3 大本營の情勢判断と処置……………329

大本營の情勢判断—寢耳に水 大本營の処置 敵のマキン島奇襲上陸

4 一木支隊の攻撃と第二次ソロモン海戦……………330

一木支隊先遣隊の攻撃 地上兵力の増強企図 第二次ソロモン海戦 ガ島に対する船団輸送の中止—鼠

5 輸送 海軍部隊によるミルン湾攻撃……………332

ラビ、サマライ攻略企図 陸戦隊の上陸 攻略断念、撤退

6 大本營の指導と川口支隊の攻撃……………333

作戦指導重点のガ島転移 川口支隊のガ島上陸 第一回総攻撃 攻撃の失敗と第十七軍

7 南海支隊の後退……………336

南海支隊の快進撃 第十七軍の前進控制 南海支隊の後退

8 第二師団の攻撃準備とサボ島沖夜戦……………337

第十七軍及び第二師団司令部のガ島進出 サボ島沖夜戦 船団揚陸の強行 第二師団攻撃準備位置推進

9 第二次総攻撃の失敗……………340

第二師団の攻撃部署 第二師団の攻撃失敗 南太平洋海戦 大本營奪回方針堅持

10 第八方面軍の設置……………342

十一月初頭の南東方面 第三次ソロモン海戦—空海の消耗戦 第八方面軍及び第十八軍の編成 大本營の新作戦構想

第二章 国力の造成と作戦との調整……………345

1 戦争指導の鍵、船舶問題……………345

作戦—船舶—国力の循環矛盾 タンカーの隘路

2 海軍のタンカー解備を繞る論争……………346

妥協的解備決定 海軍部内の論争

第三章 対華政略の変貌

3	七月陸軍二〇万総額の徴備	347
	陸軍の解備計画齟齬 三つ巴の論争—徴備決定 計 画造船の取扱い	
4	敵の反抗激化に伴う世界情勢判断	348
	情勢の検討 世界情勢判断	
5	ガ島を繞る深刻な船舶の苦惱	354
	船が欲しい、物が欲しい 消え去る解備 ガ島七〇 万噸を要求 陸軍の省・部意見対立 東條総理の発 言 閣議決定に統帥部憤激 作戰部長の更迭—問題 解決	
6	十二月十日の御前における大本營 政府連絡會議	356
	東條総理説明 議題 參謀総長説明 軍の企図と今 後の見透し 軍令部総長説明 海軍大臣説明 企画 院総裁説明 質疑応答—採択	
1	大東亜省設置を繞る政局波瀾	361
	東郷外相設置に反対、辞職 大東亜省設置の狙い 現地機構問題—陸海の意見対立	
2	対華政略の転換—対支処理根本方針の 御前會議決定	362
	対華政略転換の空氣醸成さる 国民政府參戰問題登 場 參戰に関する日本の基本態度 參戰問題新政策 へ発展 ガ島新政策を更に推進す 御前會議開かる 東條総理の提案理由説明 青木大東亜大臣説明 谷 外相説明 杉山參謀総長説明 樞府議長との質疑応	

第四章

3	新政策の発動	373
	汪主席の来訪 国民政府參戰と日華協定 日華共同 宣言と政府声明	
7	ガダルカナル島よりの撤退	374
1	第八方面軍司令部の進出を待つ南東方面	374
	ガ島転じて餓島となる 攻守所をかえた東部ニュー ギニヤ 補給確保に関する海軍の努力	
2	第八方面軍類勢挽回の努力	376
	第八方面軍の統帥発動 ガ島奪回攻撃準備に関する 努力 プナ地区確保の努力 ニューギニヤ後方要地 の確保強化	
3	大本營のガ島撤退の決心	380
	ガ島奪回の努力水泡に帰す ガ島撤退決意 ケ号作 戰協定	
4	ガ島撤退	382
	撤退準備 撤退の成功	
5	プナ地区よりの撤退	384
	プナ守備隊の玉碎 ギルワ地区における苦闘 ギル ワ地区の撤退	
6	戰勢主動権の転移	386
	岡部支隊のワウ攻撃 戰勢主動権敵手に 後退展 開? 中北部ソロモンの防衛着手 東部ニューギニ ヤの戰略態勢強化	
5	情勢の進展に伴う対独伊施策	389

1 印度、アラビアに関する日独伊

三国共同宣言問題

対英基本構想 対英具体的構想 首相印度の蹶起を促がす 印度、アラビアに対する共同宣言の検討 日独伊共同声明案 独伊の躊躇—宣言見送り 印度の反英激化

2 独ソ和平問題と独の日本に対する

対ソ参戦要望

ソ連を中心とする日独関係 独ソ和平に関する日本の態度 独ソ和平幹旋空気抬頭 対ソ参戦要望—敵在独大島大使宛回訓

3 遣独伊連絡使節の派遣

連絡使問題—陸軍の希望 戦争指導に日独見解の相違 連絡使派遣の態度 連絡使の人選と訓令 再び対ソ攻撃要望拒絶 連絡使訓令補足

4 昭和十八年二月末における世界情勢判断

世界情勢判断更改 世界情勢判断

第五篇 前方要域における作戦

第一章 南東太平洋方面の戦備強化

1 ダムピールの悲劇

八十一号作戦計画—輸送作戦 航空勢力の懸隔 悲劇の顛末—低高度反跳爆撃

2 ソロモンよりニューギニヤへ

主作戦方面ニューギニヤへ 南東方面の新作戦協定 ニューギニヤか、ソロモンか—調整の苦心 第八方

面軍命令 ニューギニヤ、ラバウル間の連繫強化

3 母艦航空兵力のラバウル進出と

山本元帥の戦死

い号作戦—山本長官の陣頭指揮 X・Y作戦 山本長官の戦死

4 東部ニューギニヤの戦備強化

ラエ、サラモアの強化 大発輸送も困難—強化歩らず マダン—ラエ道構築—道遠し 輸送開拓作戦 各部隊は正に大海の孤島に在り

5 ニューギニヤ脊稜山系内飛行場

に対する作戦準備

ベナベナ、ハーゲンの脅威 第八方面軍の作戦計画改訂 第十八軍の作戦構想 作戦の困難性

6 ソロモンの防衛強化

陸海軍の防衛担任 前方配備か、後退配備か 六月末ソロモンの配備

第二章 南西方面の戦備強化

1 昭和十八年初頭の敵情判断

ビルマの険しい雲行き 濠北方面の状況 連合軍の企図判断 手薄い陸軍防備 劣勢なる海軍戦力

2 南西方面作戦要領の決定

陸軍の新作戦計画 海軍の新作戦要領

3 第一次アキアブ作戦と北ビルマの掃蕩作戦

戦路要地アキアブ 作戦の発端—反攻の初動 飯田軍司令官の作戦指導 インデン殲滅戦 ウィンゲート旅団の侵入 密林の大掃蕩作戦 北ビルマの新認

説

4 ビルマ防衛機構の刷新強化 422

南方防衛の西陲ビルマ 新防衛機構 兵力の増強—
九月僅かに一箇師団 泰緬鉄道の建設—英国放棄の
難事業

4 第十九軍の新設その他 424

地上防備の強化—濠北戦備 第七飛行師団の新設—
転用 仏印の防衛強化—印度支那駐屯軍 タイ国駐
屯軍の新設 スンダ、バレンパンの防衛強化 第二
十五軍スマトラへ 海軍戦備の推移 印度洋方面地
上防備の強化

第三章 太平洋離島の戦備強化

1 海軍の戦略思想 428

島嶼防衛戦略の転換—陸軍兵力要望 防備強化の促
進

2 第一次陸軍兵力の派遣 429

陸軍兵力の急派—海難、予定変更

3 新聯合艦隊司令長官の統帥 430

遂撃作戰要領 第三段作戰要綱—Z作戰、Y作戰

第四章 アッツの玉砕 431

1 北東方面に対する大本營の指導 431

敵の反攻動向 北太平洋方面作戰指導要綱 陸海軍
中央協定 北海守備隊の編制改正—編成完結せず

2 アッツの死闘 432

アッツの防備 反攻切迫—アッツ島海戦 米軍アツ
ツ上陸—勦降文撤布 逆上陸作戰企図—断念、撤収

に決す 玉砕—山崎保代大佐

3 キスカの撤退 436

撤退作戰計画 撤退作戰の成功

第五章 南東方面における敵反攻の激化 437

1 敵の攻勢開始 437

濠軍サラモアを窺う ムボの攻撃 米軍のレンドバ
島及びナツソウ湾上陸 ムンダ攻略の布石—常套戦
法

2 中部ソロモンの作戰 438

海軍の反撃 ムンダの防衛強化—クラ湾夜戦 ムン
ダの激戦—ジャングル清野と化す コロンバンガラ
島への撤退

3 サラモア地区の激戦 441

連合軍の全面攻撃開始 本防禦線の激闘—寸土を争
う接戦 ベナベナ作戰企図の放棄 ニューギニア陸
軍航空の大被害 カミアタム高地の陥落—草山の死
守

4 戦勢北部ソロモンへ 444

コロンバンガラ島の撤退 ベラベラ島沖夜戦 北部
ソロモン、ビスマルク群島の防備強化

5 戦局ダムピールへ移る 445

ラエ、サラモア確保の望み絶ゆ ラエの放棄—転進
第二十師団主力のフィッシュハーフェン派遣

第六章 大東亜戦略指導 447

1 対華新政策結実への努力 447

1	戦争指導に関する日独の見解対立	460
第七章 情勢の推移に伴うその後の 対外施策		
9	大東亜共同宣言の採択	459
8	日華同盟条約の締結とその後の対重慶 政治工作	456
7	タイ国領土を恢復	456
6	東印度原住民の政治参与	456
5	自由印度仮政府の樹立	454
4	東條首相の訪比と独立準備	453
3	ビルマの独立	452
2	大東亜政略指導大綱の御前會議決定	448
1	陸軍の熱意―東條大将の南京訪問 結実の道程 金 の現送による対華経済援助	

第六篇

第一章 絶対国防圏の設定とその政戦略

1	大本営の敵情判断	473
2	大本営作戦方針の変更	474
3	九月二十五日の連絡會議	475
4	戦争指導大綱の御前會議決定	483
絶対国防圏の作戦		
4	カイロ會議及びテヘラン會議と歐洲和平説	467
3	伊国の降伏と三国共同戦争の破綻	464
2	情勢推移に伴う対ソ態度	462
1	独の対ソ夏季攻勢企圖 日本の見解―重光外相初の 連絡會議 大島大使へ回訓	

明 重光外相説明 青木大東亞大臣説明 鈴木企画
院總裁説明 岸商工大臣説明 原樞府議長との質疑
応答 東條首相発言―採択

5 その後の船舶問題……………493

徵備と造船 昭和十八年一月二五万総噸の建造増加
キスカ撤退作戰と千島方面戰備強化のための徵備
徵備油槽船の保有量決定と損耗補填 再び昭和十八
年度甲造船計画改訂 昭和十九年度甲造船計画 甲
造船計画の画期的増加改訂 絶対国防圈戰備強化の
ため再び徵備 トラック空襲と大増徴

6 国内施策の進展……………495

内閣に戦力増強の三機関設置 企業整備の断行 食
糧増産と衣生活の簡素化 学徒動員 地方行政協議
会及び東京都制発足 軍需省創設

第二章 新作戦方針に基く大本營の指導……………496

1 中南部太平洋方面作戰要領の発動……………498
大本營の作戰要領 第八方面軍の持久任務 新作戦
方針と海軍……………498

2 南東方面……………499
作戰指導要領 南東方面の戰略的變貌 第八方面軍
の持久方略―絶対の境地……………499

3 濠北方面……………500
第二方面軍の進出―兵力増加 第四南遣艦隊の新設
實質的作戰準備進まず……………500

4 中部太平洋方面……………501
陸軍部隊進出の経緯 本格的戰備強化 輸送の困難……………501

とその実績

第三章 国防圈前衛線の逐次崩壊……………503

1 国防圈前衛線に対する連合軍の急迫……………503

連合軍のフィンシュハーフェン上陸 国防圈前衛線
―挑むマ、ニ兩米將 ダムビル西岸の防備 初期
の反撃―西岸激闘の序曲 第二十師団の前進促進
マダン地区強化

2 現地軍の持久作戰計画……………505

現地部隊の立場―陸海一様ならず 現地部隊の敵情
判断 第八方面軍の持久作戰計画 現地海軍部隊の
作戰構想

3 ダムビル西岸の激闘と
ボーゲンビル島の無力化……………509

中井支隊の善戰 第二十師団の第一次攻撃 サラワ
ケット越え転進―血涙の任務附与 軍司令官の現地
指導 連合軍のタロキナ上陸 海軍の反撃―水上部
隊集中使用終焉 陸軍の反撃―逆上陸併用も空し
ボーゲンビル島無力化す

4 ギルバートの失陥とフィンシュ
ハーフェン奪回企図の放棄……………512

マキン、タララの防備 敵の上陸と我が玉碎 ダム
ビル西岸の攻防―第二十師団 フィンシュ奪回企
図を放棄す マダン地区防衛強化―第九艦隊編成
西部ニューブリテンの激闘とダムビル
の崩壊……………514

5 ダムビル東岸の防備 マーカス反撃―空陸の猛攻……………514

統かず ツルブの失陥—松田支隊後退 ダムビル
西岸の崩壊—シオ地区失陥 マダン地区第一線とな
る

6 マーシャルの失陥とトラックの無力化……………517

マーシャルの防備—空地とも薄弱 敵の奇襲—時機、
地点とも意外 クェゼリン及びルオットの失陥
トラック空襲—聯合艦隊主力のバラオ避退 ラバウ
ル戦略価値を失う—機もなし 東條・嶋田両大將
の統帥部長親補 ブラウンの失陥 マリアナ空襲—
国防圏の要衝危し

7 ラバウルの孤立……………520

前衛線確保の最後の努力 アドミラルティの防備と
失陥 ラバウル孤立—前衛線完全崩壊 第十七軍
のタロキナ攻撃—最後の一戦

第四章 絶対国防圏の縦深的強化……………522

1 虎号兵棋……………523

敵の反攻作戦線の判断 我の採るべき方策 作戦関
連の国内施策—五万機目標

2 中部太平洋に対する兵力増強……………524

第三十一軍、中部太平洋方面艦隊の新設 「松輪送」
と第三十一軍基幹兵力 陸海軍中央協定 第三十一
軍の防備強化

3 北東方面の戦備強化……………527

新統帥組織と新作戦任務 第五方面軍の兵力及び配
備 北海道決戦思想

4 台湾及び南西諸島の戦備強化……………528

十号作戦準備—航空作戦の基盤造成 画期的戦備強
化—敵の攻撃目標?

5 南方軍の新態勢……………530

南方統帥の一元化 南方軍基本任務の更改 決戦構
想—尚武の佳節に会同開示 総司令部のマニラ進出

6 十一号作戦準備……………533

大本營の指示—比島大航空要塞化 作戦準備実施の
状況

7 本土防衛態勢の強化……………534

大本營の指導—新統帥組織と任務 防衛総司令部の
防衛作戦要綱 各軍の作戦準備 防空作戦準備と沿
岸防禦施設

第五章 「あ」号作戦計画……………536

1 決戦の機迫る……………536

四月における海軍の態勢 「雄」作戦構想—敵機動
部隊急襲企図 五月初頭の敵情判断

2 作戦計画……………537

御前研究—陸海両次長の応答 大海指第三七三号—
「あ」号作戦命令 決戦海面と濠北との関係 第一
航空艦隊の増強—基地航空の主戦力 第一機動艦隊
の編成—唯一の母艦部隊

3 聯合艦隊の準備……………540

聯合艦隊の計画準備—展開 第一機動艦隊の計画
第一航空艦隊の計画

第六章 西部ニューギニアの作戦……………542

第七章 マリアナの失陥

- 1 濠北の作戦準備 542
- 2 第二方面軍の統帥発動 濠北作戦の一般構想 方面軍の作戦計画―会同示達 南方軍の企図―四角要塞問題 544
- 3 ホルランジャの防衛 544
- 4 防備問題―第十八軍隷下に入る パラオ空襲―聯合艦隊司令部の遭難 敵上陸 救援―南方軍抑制 撤退 確保要線の変更 第十八軍の決意 547
- 5 サルミ作戦 550
- 6 ヘルヴィング湾強化問題 サルミ附近の作戦準備 敵上陸 攻撃に前進 本陣地の防戦 550
- 7 ビアク作戦 554
- 8 戦備 反撃―沼田参謀長の現地指導 渾作戦―ピアク突入作戦 善戦敢闘 渾作戦中止―最後の希望絶ゆ 奮戦―渾作戦二度、三度中止 死闘―葛目大佐軍旗奉焼、自決 ムンホル及びサンサポールの戦闘 554
- 9 アイタベ作戦 559
- 10 攻撃準備 決心の再確認―安易に就かず 軍司令官の訓示―大義捨身 攻撃計画 坂東川の渡河戦 坂東川西岸の決戦 その後―東方機動 559
- 11 敵のマリアナ来襲 559
- 12 敵の来襲 マリアナ基地航空の潰滅 敵上陸時のサイパン―軍司令官不在 地上部隊の反撃 561
- 13 マリアナ海戦―「あ」号作戦 561
- 14 「あ」号作戦決戦発動 第一機動艦隊の出撃 第一 561

第八章 東條内閣の総辞職

- 1 航空艦隊の潰滅 海戦の経過―海戦史上空前の規模 二度目の乙旗―海上決戦の終焉 565
- 2 太平洋の防波堤潰ゆ 565
- 3 タボチー山の激闘 玉砕攻勢―南雲、斎藤両中将自決 大本営の処置 567
- 4 グラム、テニアン島の失陥 567
- 5 孤立したグラム、テニアン グラムの玉砕―小畑軍司令官戦死 テニアン島の玉砕―角田長官も共に 569
- 6 東條内閣の総辞職 569
- 7 マリアナ敗戦の衝撃と和平気運の萌芽 569
- 8 情勢の悪化と戦争指導の行詰り 和平気運の萌芽 570
- 9 東條参謀総長の更迭 570
- 10 総長問題に関する秩父宮の御質問 梅津大将の総長就任 572
- 11 重臣及び木戸内府の動向 572
- 12 重臣の動向 倒閣の密議 木戸内府とその周囲 573
- 13 内閣改造の行詰りと総辞職 573
- 14 内閣改造行詰まる 内閣総辞職 政変と陸軍の態度 重臣会議 574
- 15 東條大将の態度 会議の状況―木戸日記 寺内元帥、小磯大将を奏請 579
- 16 小磯・米内連立内閣の成立 579
- 17 近衛公連立を示唆す 再び重臣会議―小磯・米内連立決定 小磯大将の陸海軍に対する要求 陸海軍の態度 連立内閣の誕生―首相の第一声 東條大将予備役編入、米内海相現役復帰 579

第七篇 大陸方面の作戰

第一章 イムパール作戰

- 1 印度進攻作戰構想の芽生え 584
全般戦局と東部印度作戰 二十一号作戰の構想—南方軍 作戰準備と第十五軍 二十一号作戰準備の中止 印緬国境の形相 彼我情勢の変化 印度施策—ボース、シンガポール進出 牟田口軍司令官の進攻主張 「ラングーン」兵棋演習
- 2 作戰準備発効の経緯 587
「ウ」号作戰準備命令の下達 作戰計画—特色と弱点 準備行動開始—戦機熟す
- 3 怒江及びフーコン作戰の展開 589
怒江作戰—ウ号作戰の序幕 死（フーコン）の溪谷 彼我の激突 レド公路と敵の奪回企図 牟田口軍司令官と田中師団長の意見対立 連合軍の大規模反攻協議 英印軍の反攻動向 その後のビルマ遠征軍 敵空軍の跳梁—全ビルマ制圧 我が敵情判断 必死のイムパール進攻準備 第五飛行師団のカルカッタ、雲南進攻
- 4 イムパールに向う進攻作戰 593
イムパール進攻作戰の決断 一抹の懸念—大本營の要望 方面軍の全局作戰指導計画 方面軍指揮組織の改編 空地作戰協定—展開 印度国民軍との協同作戰 第十五軍の進攻命令下達 ハ号作戰—第二次アキヤブ作戰 敵の新戦法—立体戦術—解囲後退 ウインゲート空挺兵団の侵入 敵情変化—決心変化

第二章 雲南及び北ビルマの作戰

- 1 フーコン作戰の終焉 607
最後の防衛線カマイン 増勢する米支軍 第十八師団の転進—方面軍、軍の指導
- 2 ミートキーナの失陥 608
ミートキーナの攻防始まる ミートキーナの籠城—水上源蔵少将 最後の死闘
- 3 雲南正面第五十六師団の奮戦 610
遠征軍の雲南総反攻開始 第五十六師団の反撃—内なし 対空挺兵団作戰—第三十三軍編成 続くフーコンの苦戦 空挺兵団侵入の影響 第三十三師団トンザンに敵を包囲す 無念、錯誤の連続—長蛇を逸す ウ号作戰蹉跌の第一段階 軍主力のチンドウイン河渡河 第三十三師団長罷免更迭 空挺兵団の撤退
- 5 イムパール作戰の頓挫 601
攻撃頓挫の兆 ビシェンプールの総攻撃 作戰の転機失わる 主攻撃正面の変更 第三十一師団の独断退却 阿師団長の罷免—その例なし イムパール戦線の崩壊 ウ号作戰の中止
- 6 ジビニュー山系への退却 604
第一段退却—チンドウイン河へ 第二段退却—ジビニュー山系へ 我が損害—特に兵器の大部喪失 軍首脳の変更—軍の再建
- 7 第二十八軍の作戰 606
苦難増す第二十八軍 完作戰計画に基く配備変更

線作戰の妙

4 断第一期作戰

方面軍の新作戦指導 第三十三軍の作戰計画 竜陵の攻撃 平戛救援

611

5 拉孟、騰越守備隊の玉碎

拉孟の攻防—鬼神の姿 壯絶鬼神も避く 騰越守備隊—軍旗奉焼玉碎

612

6 断第二期作戰

ナンカンにおける反撃企図 第三十三軍の兵力返還 竜陵、芒市の撤退 北ビルマの全戦局—敵の企図判断 パーモ救出作戰

613

7 第五飛行師団の奮戦

「ハ」号作戰協力 「ウ」号作戰協力 戦力の減耗

615

第三章 大陸打通作戰

616

1 作戰準備

敵情 作戰開始前の派遣軍の状況 作戰目的—一号作戰 本作戦の問題点—世紀の大遠征 大命下達 兵力資材の準備と企図秘匿

616

2 支那派遣軍の作戰指導

兵力運用 京漢作戰指導要領 湘桂作戰指導要領

621

3 京漢作戰—コ号作戰

作戰開始前の彼我の状況 許昌攻略及び京漢線打通 洛陽方面に向う旋回作戰 洛陽攻略—史上に名高い古都陥落

623

4 湘桂作戰の敢行—ト号作戰

衡陽に向う攻勢—作戰指導の腹案 攻勢発起—一部

626

第八篇 比島決戦

洞庭湖舟艇機動 長沙、瀏陽附近の攻略—果敢なる運動戦 第一次衡陽攻撃—追撃の余勢、不成功 第二次衡陽攻撃—一部成功更に準備 第三次衡陽攻撃—軍長以下投降 第五航空軍の目覚しい奮闘 第十三軍の牽制作戦

第一章 小磯内閣の基本政策

632

1 マリアナ喪失に伴う大本営陸軍部の戦争指導構想

632

戦争指導の空白 大本営の戦争指導構想

2 最高戦争指導会議の設置

635

小磯首相の継戦構想 最高戦争指導会議の設置 次長の出席問題—構成員のみの会議 戦争指導上の諸問題 検討

3 国力の推移とその後の見透し

637

綜合結論 各要素の検討

4 世界情勢判断及び戦争指導大綱の御前會議決定

649

會議出席者 議題第一号 議題第二号 小磯総理説明 梅津參謀総長説明 重光外相説明

第二章 小磯内閣の対外政策

657

対外政策の地位

1 対ソ施策

658

特派使節の人選—広田元首相に決定 ソ連わが特派派遣を拒否す その後の対ソ施策 問題のスターリン演

説―無策、上策

2 対独施策

重光外相独ソ和平幹旋を訓令す 独の急変に対処する措置腹案

660

3 対重慶政治工作

対重慶政治工作の基本態度 対重慶和平条件―滿洲除き全部譲歩 陛下、重慶工作を懸念せらる 政治工作発動す―宇垣大将大陸旅行 現地責任者矢崎中将となる 汪主席逝去と工作の渋滞 工作水泡に帰す―終止符、繆斌工作

661

4 対仏印施策

仏印の状況―コスム大使の見解 対仏印措置の腹案概定 仏印武力処理の経緯

664

第三章 小磯内閣の国内施策

1 物的国力の運営

運営の狙い―急速戦力化 物的国力運営の基礎事項 物動計画の実体―藤原軍需相報告 未稼働資材の活用 液体燃料確保対策―レイテの波及

666

2 輿論指導

決戦輿論指導方策要綱―情報局 軍人援護の強化―育英、保育、扶助

670

3 国内警防施策

総動員警備要綱 国内防衛方策要綱―防空対策 総合計画局の設置

671

4 総合計画局の設置

673

第四章 捷号作戦準備

673

1 大本營の新作戦方針

2 捷号作戦準備要綱

大本營陸軍部の作戦準備 大本營海軍部の作戦準備 全航空部隊海軍統一運用の提案 捷号航空作戦中央協定―実質的一体化 捷号作戦準備に伴う兵力整備 捷一号作戦の構想―比島決戦計画

674

3 戦術、戦法に関する新構想

航空運用の狙い―健在、輸送船攻撃 上陸防禦方式の変更―上陸防禦教令 航空特攻戦法と特攻隊の編成 海上奇襲兵器等の採用

680

4 現地各軍の捷一号作戦準備

南方軍の作戦計画―地上決戦ルソン島 第十四方面軍の敵進攻判断 フィリピン作戦計画の修正 第三十五軍の作戦指導要領 配備及び作戦準備の促進 第四航空軍の状況―陣容一新 四航空軍の戦闘指導方策 飛行場及び情報網の整備

683

5 聯合艦隊の捷号作戦準備

聯合艦隊の捷号作戦計画 航空艦隊の現勢―マリアナ後の再建 海上艦隊勢力の実情 戒備進捗の支障と遅延

688

第五章 比島決戦の概定と台湾沖航空戦

1 ペリリュー、モロタイの戦闘

敵機動部隊の航空決戦 ダバオ誤報事件 セブの空襲―奇襲、我が損失大 ペリリュー島の防備―敵攻撃開始 ペリリュー、アンガウルの勇戦―御嘉賞 敵のモロタイ島上陸 遊撃斬込み戦―高砂族部隊

690

690

2	決戦方面の概定	693
	大本営の敵情判断 ルソンの本格的空襲 大本営の決戦方面概定 南方軍の意見具申 山下奉文大将の方面軍司令官就任	
3	台湾沖航空戦	695
	聯合艦隊の作戦警戒発令 基地航空部隊作戦発動 航空決戦の連続 戦果発表―「勝利はわが頭上に」 戦果拡充作戦―実効果なし 戦果の実相―調査の結論 陸軍知らず	
第六章 レイテ決戦の発起		
1	敵のレイテ来攻	697
	敵軍スルアン島に現わる 第四航空軍先ず攻撃を発令す 敵艦艇レイテ湾内に進入す―暴風雨	
2	捷一号作戦の発起	699
	捷一号発動の上奏 大本営発動―比島決戦開始 南方軍及び第十四方面軍の作戦発起 決戦指導方策の変更―戦果過信 新企図レイテ決戦―方面軍との調整	
3	航空作戦	702
	航空部隊の集中 航空攻撃の初動―点滴攻撃 航空総攻撃の準備 総攻撃実施―空海呼応、押し切る？	
4	地上作戦	705
	第十六師団の戦闘―初動混乱 第三十五軍の会戦計画 カリガラ平地に遭遇戦を指導す	
5	油槽船問題	708
	油槽船の実情―聯合艦隊の解隊要請 陸軍条件つきで同意す	

第七章 レイテ沖海戦		
1	聯合艦隊の作戦要領	709
	史上空前の艦隊突入作戦	
2	海上各部隊の機動	710
	栗田部隊の行動発起と志摩部隊 小沢部隊のフィリッピン海面進出 シブヤン海海空戦と栗田部隊反転―避退 全軍突撃せよ―更に進撃	
3	サマール沖海戦	712
	スリガオ海峡の夜戦―悲痛な最後 志摩部隊反転避退―突入断念 小沢部隊ルソン東方洋上の善戦 サマール沖海戦―大和の初弾命中 栗田部隊遂にレイテに突入せず	
第八章 レイテ決戦		
1	大本営の指導	715
	陸海軍航空中央協定―上陸破摧 地上決戦兵団の増強	
2	航空作戦	717
	現地陸海軍航空協同要綱 航空戦の推移 航空特攻―攻撃力の主体となる	
3	第三十五軍のレイテ会戦	719
	初期地上作戦の推移―第一師団到着 リモン附近の不利期遭遇戦 第一、第十六師団の戦況 逐次戦闘加入―主動権転移 第十四方面軍の会戦指導 第三十五軍の作戦指導変更 薫空挺隊 ブラウエン作戦―最後の総攻撃 空陸よりブラウエン突入―攻勢了る	
4	レイテ作戦の終結	724

オルモック附近の戦闘 レイテ作戦の放棄—ミンドロ島上陸

5 船舶問題

725

陸軍船舶の状況 船腹一五万総噸の増加要求 陸軍部の膨大要求—省・部対立激化 徴備決定—海軍土壇場に割込む

6 機密戦争日誌の記事

727

比島決戦発動と聯合艦隊出撃 レイテ決戦終結に対する大本営陸軍部 西部戦線における独軍の攻勢

第九篇 本土決戦

731

第一章 南北両国防圏域の分断と

日満華の孤立化

732

1 昭和二十年初頭の戦争指導

732

レイテ決戦終結の影響 事態の推移に関する大本営の觀察 基本国策根本的検討の転機—論議なし 大本営の戦争指導腹案 本土決戦思想の萌芽 南北海上輸送の杜絶

2 日満華態勢の強化

735

日、満、華態勢の現状と強化措置 中国経済の確立と物資調達の統一 大陸重要輸送の確保施策—一貫輸送日、満、華産業配置の修正

3 本土防衛のための国内施策

737

緊急施策措置要綱 決勝非常措置要綱

4 昭和二十年二月における世界情勢判断

742

情勢の悪化—日独最後の関頭に立つ ヤルタ会談—ソ連対日参戦確定 世界情勢判断

第二章 大本営の新作戦方針及びこれに基づく作戦準備

これに基づく作戦準備

745

1 情勢判断

745

敵情判断—米軍の戦略 ソ連及び重慶の動向

2 本土防衛態勢の概観

746

陸軍の防衛態勢 海軍の防衛態勢 防空態勢

3 新作戦方針

747

新作戦方針策定の経緯—最初の共通計画 帝国陸海軍作戦計画大綱

4 全般指導

749

大本営命令 未曾有の作戦準備

5 本土方面の作戦準備

751

緊急兵備—内地防衛軍 新兵備計画 第一次兵備と兵力転用

6 台湾及び南西諸島方面

754

全般指導要領 台湾の地上作戦準備—台湾人召集 沖縄の地上作戦準備 第九師団の抽出転用問題—禍根残る 天号航空作戦計画—海軍の熱意向上 計画の無理と海軍苦肉の丹作戦

7 中国方面新作戦準備

758

岡村総司令官の申言—四川進攻作戦 陸海軍中央協定兵力運用と兵備

8 富号作戦—風船爆弾攻撃

760

米本土攻撃の意欲—富嶽機から富号へ 風船爆弾の着想研究とその完成 攻撃準備—コンニャク、大劇場動員 参謀総長の攻撃実施命令 風船爆弾米本土に飛ぶ

第三章 中国及び南方方面作戦の状況

1 湘桂作戦の終結

第六方面軍の新設 第二十軍等の転用増加 浙東作戦（所謂節号作戦） 桂林、柳州の攻略準備 当面の敵地上勢力概観 準備の困難―航空劣勢に陥る 攻撃進発命令―敵主力捕捉の企図 桂林、柳州の攻略―計画変更敵を逸す 追撃及び爾後の兵団部署―貴州に達す 粵漢打通作戦―術工物の無疵占領 第二十三軍の対米東面戦備 老河口及び芷江作戦―敵面目一新

2 フイリッピン方面の持久作戦

敵のミンドロ島上陸―サンホセ突入 決戦から持久へ―三首脳幕僚会談 敵情判断―米軍ルソン上陸企図 三大拠点蟠踞の持久戦計画 各兵団の作戦準備―マニラ解放 空からの敵の攻撃 リンガエン湾岸の戦闘―最初の爆雷特攻 北部ルソン抗戦根拠地の構成 マニラ周辺の戦闘―岩淵海軍少将自決 コレギドール陥落 第四航空軍司令官の台湾転進 クラーク西方拠点建武集団の戦闘 南部ルソンの持久戦 振武集団主力正奇の攻防

3 イムパール作戦後のビルマ

ビルマ方面作戦計画の変更 ビルマ方面軍司令官の新作戦構想 第十五軍のイラワヂ河に向う転進計画 第十五軍の退却実施―英印軍の総追撃 盤会戦指導要領 第三十三軍の奮戦―曉町、モンミット反撃 印支ルート遂に再開さる 盤決戦の序曲―第十五軍の三号攻势一、二号攻势への転移準備と意見具申 ビルマ方面軍の会戦指導 メークテラの危急 イラワヂ戦線の崩

壊 メークテラの失陥 完作戦―第五十四師団の奮戦 エナンジョン正面の激戦

4 南西方面の防衛

レイテ決戦に伴う防衛態勢の整備 第七方面軍―第三十七軍の設置 第三航空軍の編合改組 寺内元帥フィリッピンからサイゴンへ 南方軍持久に転移、陸海軍指揮統一成る 仏印及びタイへの戦力集中 マ号作戦―仏印武力処理と安南等の独立 シンガポール周辺の戦備強化 ボルネオ地区―サンダカン死の行軍

第四章 戦争指導上の諸問題

1 戦争指導機構問題

戦争指導機構の致命的欠陥 統帥に対する小磯首相の不満 小磯総理特旨により大本營に列す

2 陸海合同問題

宿命的陸海の対立―国力二分 対立解消への努力―論議に暮れる 陸海合同に関する御下問と奉答

第五章 硫黄島の作戦

1 彼我の情況

硫黄島の価値と敵の動向 我が防備―孤立無援

2 硫黄島の攻防

米軍上陸―水際の反撃 主陣地帯の激戦―敵全島を耕す 最後の玉砕戦闘―咽ぶ硫黄ガス 栗林兵団長訣別の電報

第六章 沖繩作戦

1 九州沖航空作戦

米機動艦隊の九州沖来攻と我が出撃 第五航空艦隊の攻撃―戦果の誤判 沖繩へ来攻―真企図再び誤判

2 米軍の沖繩上陸

指揮関係の改訂―陸海航空統一指揮 大海令第五一三号―天号主体の思想 天号作戦発動―無理と未完、初動逸機 米軍の本島上陸 第三十二軍出撃に決す

3 航空総攻撃と第三十二軍の戦闘

菊水一号作戦 海上特攻隊の悲劇―帝国艦隊葬送曲 第三十二軍の総攻撃決行寸前に中止 菊水二乃至五号作戦―地上漸く攻勢 陸海軍作戦構想の相違 第三十二軍の戦闘 最後の地上攻勢

4 天号作戦の続行

米空軍の反撃―沖繩基地活動 菊水六乃至八号作戦 義号作戦―義烈空挺隊のなぐり込み 陸軍、天号作戦を見限る 海軍、天号作戦を続行す 地上軍喜屋武の複郭陣地に退却

5 沖繩の失陥

最後の航空総攻撃と第三十二軍の全滅 牛島軍司令官、長参謀長の切腹 海軍の天号作戦中止 本作戦の異色と彼我の損害 戦果誤判の戦訓と沖繩作戦の意義

第七章 大本営の本土決戦準備

1 決号作戦準備要綱

809

801

802

803

806

808

809

策定の経緯 作戦要綱 兵力運用計画（集中計画）国内抗戦及び国内警備 交通及び通信 兵站 陸海軍間の作戦指揮協定 海軍の本土決戦計画―天号作戦間

2 本土の決戦統帥組織

陸軍の新統帥組織―第二次兵備 海軍の新統帥組織―総司令部、日吉台に 沖繩作戦末期の本土作戦準備の概況 九州作戦準備の優先―決号輸送 第三次兵備前の各方面軍 第三次兵備の繰上げ実施 本土防衛総兵力と陸海軍指揮組織

3 航空及び海上部隊の作戦計画

航空部隊の攻撃目標―陸海軍の調整 航空攻撃に関する中央協定 本土の航空兵備―全航空特攻と要塞化 海上特攻作戦計画 残存海上部隊の攻撃計画 特攻作戦による戦果の期待 戦果算定の基礎と一部の懸念

4 敵情判断

情報収集いよいよ困難度を増す 七月初頭の敵情判断―米軍の対日戦略 米軍の対日指向兵力判断 重慶及びソ連軍の戦略判断 米軍の本土攻撃要領及びその様相

5 本土決戦の思想と戦法

基本思想 沿岸決戦思想の浮動 決戦思想の固成及び普及徹底 戦法―遂撃決戦の一般要領 対戦車肉迫攻撃 終戦頃の作戦準備進捗状況

第八章 主要方面の作戦計画

一 九州及び関東に対する米軍攻撃要領の判断

835

815

821

828

832

835

835

米軍の九州進攻要領 米軍の関東地方攻略要領

二 西日本における作戦準備

1 九州及び四国方面の作戦準備

九州重点思想の萌し—九州決戦の意義 第三十六軍の九州推進問題 指揮組織と作戦の分担—陸海一軍の航空及び海上作戦要領 地上軍の兵力と配置 地上軍の決戦要領 九州決戦の勝算—官民の敢闘精神 決戦遂行上の懸念

2 近畿、山陰方面の準備

近畿方面 山陰方面

三 東日本の作戦準備

1 関東方面の作戦準備

指揮組織と作戦の分担 地上軍の配置と決戦要領 帝都防衛—多分に名目的 大本営、政府の移転問題—松代大本営

2 東海及び東北の戦備

東海方面 東北方面

四 北東及び朝鮮の作戦準備

1 北東方面

敵情判断—米・ソ両軍 作戦構想と兵力配置

2 朝鮮方面

六月の情勢—腹背共に重大化 南鮮の作戦準備状況—北鮮分離 作戦計画の修正—対米、ついに對ソ

第九章 對ソ作戦準備

1 ソ連の対日企図判断

對ソ情勢判断—参戦は時機の問題 ソ軍の増強とその

推移

2 對ソ作戦方針の改定

東正面攻勢の方針—黄金時代 全面持久構想—今昔の感

3 関東軍の對ソ作戦準備

関東軍の新作戦計画 態勢の大転換—複郭中心は通化大連会談—三大将の作戦会同 作戦準備の実情

4 関東軍の増勢

瘦せ細った関東軍—在米師団全部転用 水膨れの関東軍—根こそぎ動員 増強の二の手—中国戦線から抽出

5 北東方面等の對ソ作戦準備

樺太及び千島の戦備 蒙疆方面の戦備

第十章 本土における防空作戦

1 本土防空の基本理念とその適用

防空の基本理念—積極防空 戦線の後退に伴う防空態勢の整備

2 防空組織

防空組織の大綱 情報網の構成—電波警戒網 防空戦闘機及び高射砲の適性

3 防空作戦準備

防衛総司令部の防空作戦要領 敵の本土空襲に関する判断 防空部隊の作戦準備

4 空襲の激化と我が防空作戦

中国大陸基地B29の九州来襲 マリアナ基地B29の本土来襲 機動部隊—艦載機の本土初襲来 空襲の激化—無差別、戦略、戦術爆撃 決号防空作戦の計画 指

847

847

846

845

844

843

841

841

841

837

837

864

862

858

857

857

856

854

850

849

揮組織と兵力―陸海の調整 多難を増す防空作戰 制
号作戰

5 空襲被害……………870

人的被害 都市の焼失 疎開―市民の疎開実績 交通
の逼迫―海上杜絶に瀕す 食料及び生活必需品の窮乏
重要産業の麻痺

第十篇 終戦の経緯……………873

第一章 鈴木内閣の成立……………874

1 天皇の御憂慮……………874

戦局と終戦構想の変転 不安の増大と小磯内閣―和平
の底流 御軫念、重臣の意見を徴せらる 重臣の奉答
―個別且つ秘密裡 近衛の陸軍共産革命論と早期和平
論 和平論の対立推移

2 小磯内閣の崩壊……………877

繆斌工作企図の不成功 陸相兼摂意図の挫折 総辭職
とソ連の中立条約廃棄

3 鈴木貫太郎大将の登場……………878

大本営内閣案の結末 準備された重臣会議 重臣会議
開催とその応答―知らぬは？ 鈴木大将に大命降下
組閣に関する陸海軍との折衝

4 陸軍の動向 阿南陸相の決定―衆望による登場 米内
海相の留任……………882

5 組閣の完了と外相問題……………883

組閣、新内閣の陣容 東郷專任外相―重臣、首相を押
切る 鈴木内閣の戦争指導機構

第二章 対ソ工作の開始……………885

1 対ソ工作討議への動き……………885

ソ連の脅威―参戦阻止要望 沖縄作戰の望み絶ゆ 独
逸の降伏―五月八日 東郷外相の腹案―早期終戦への
誘導

2 五月中旬の対ソ工作秘密討議……………887

六巨頭のみの会議―外相提案 対ソ交渉に一致―同床
異夢 外相起草の対ソ交渉決定文書 講和の仲介求む
るも条件決定せず

3 対ソ予備交渉の開始……………889

広田・マリック会谈の開始 海外出先機関の和平的動き
下村國務相の奔走―六相懇談会

第三章 本土決戦国内態勢の整備……………890

決戦態勢整備の眼目

1 軍事特別措置法……………890

目的は本土の作戰地化 本法の内容

2 船舶、港湾の一元運営……………891

大本営に戦力会議を附設す 大本営に海運總監部を設
置す 運通大臣指揮の下に港湾を一元運営す 陸海軍
中央協定

3 地方行政組織の臨戦化……………892

軍組織と地方行政組織の吻合 地方總監府の設置

4 国民戦闘組織……………893

国民義勇隊の組織と運用 義勇兵役法―国民総服役
国民義勇戦闘隊統率令―軍令

5	戰時緊急措置法	895
	非常事態に應ずる措置 戰時緊急措置法の狙い	

4	第六章 六月八日の基本政策	895
---	---------------	-----

1	本土決戦政策確立への動き	895
	臨時議会の召集—米内海相反対 基本大綱の審議開始	
2	国力の現状	896
3	世界情勢の推移判断	898
4	戦争指導の基本大綱	899
	和平の含みと実際問題	
5	六月六日の最高戦争指導会議	900
	參謀総長代理発言 軍令部総長発言 構成員の討議— 外相の不満と疑念 基本大綱の採択—一部増補改訂 帝都固守—首相提案 六月七日の閣議—切腹当責の覚悟	
6	六月八日の御前會議	903
	軍令部総長発言の重要修正 豊田軍需大臣説明 東郷 外務大臣説明 平沼樞密院議長の所見開陳 御前會議 決定—総理所信開陳	

5	第五章 天皇の終戦御意図	907
---	--------------	-----

1	混乱した臨時議會と内閣	907
	天佑天罰事件—議場混乱 米内海相の辭意表明 海相 の飄忽と終戦促進の決意	
2	木戸内府の時局收拾対策試案	908
	対策試案の内容—親書奉戴の交渉 天皇の御満足—具 体的第一着手 首相及び陸海外三相の同意	

3	陛下の六巨頭召集	910
	六巨頭対ソ和平仲介交渉に決す 直接の御下命 鈴木 首相初めて自信を持つ	

4	対ソ工作の具体化	911
---	----------	-----

ソ連の意向打診続行 天皇の御督促と特使派遣の御発
意 日本との和平意図初めてモスコーに通ず 天皇の終
戦要望メッセージ 近衛特使派遣準備—条件決せず
スターリン、ポツダムへ ソ連の拒否—七月二十日朝
最後の交渉努力—一縷の希望

6	第六章 ポツダム宣言	915
---	------------	-----

1	米英支三国宣言の發表	915
	三国共同宣言—七月二十六日 外務省の内容検討とそ の要点	

2	日本の態度	918
---	-------	-----

東郷外相の見解と態度 最高戦争指導會議及び閣議
宣言發表問題の論議 鈴木首相の黙殺談話 その後の
対ソ交渉—行悩み 宣言發表の反響—内閣參議の受諾
進言

7	第七章 原子爆弾とソ連の参戦	921
---	----------------	-----

1	原子爆弾	921
	新型爆弾による広島の惨害 原爆第一号—彼我ともに 確認 天皇の即時終戦御意図決定的となる	
2	ソ連の参戦	922
	皮肉且つ驚くべき回答 非望破摧の企図—対ソ作戰発 動	

第八章 終戦の聖断——八月十日の

御前会議

..... 924

1 八月九日の最高戦争指導会議

..... 924

陛下及び終戦派要人のボ宣言受諾決意 受諾条件を繞る対立論争 原爆第二号、長崎に投下

2 和平についての最初の閣議

..... 926

第一回の臨時閣議 臨時閣議の再開——海相約交

3 八月十日の御前会議

..... 927

異例の御前會議奏請 鈴木首相の提案——自ら朗読 外相提案理由説明 陸相及び參謀總長の反対 平沼首相所見——軍令部総長後廻し 軍令部総長の反対 鈴木首相聖断を乞う 聖断の事前準備と干渉した人々 聖断下る 臨時閣議三たび——散会午前四時

4 聖断に伴う対内外措置

..... 930

宣言受諾電報と放送 情報局總裁談 陸軍大臣訓示と公表の経緯

第九章 終戦の聖断——八月十四日の

御前會議

..... 932

1 四国回答の接受

..... 932

四国回答とその訳文 外務省の態度——慎重に鵜呑み決定 阿統帥部長の反対上奏 大臣総長連名電——継戦意志明示 回答を繞る要人の動き

2 再び分裂した閣議及び最高戦争指導會議

..... 934

十二日の閣議 首相の再照會論——外相の苦境 皇族會議 鈴木首相の顧慮——聖慮 十三日の最高戦争指導會議

會議の途中に外相參内上奏 再び閣議へ——賛否の決 陸軍と海軍軍令部の反対の動き

3 八月十四日最後の聖断遂に下る

..... 937

更に異例の御前會議——不意の御召し 三元帥召集せらる 涙の聖断

4 終戦の詔書發布

..... 939

終戦の詔書 阿南陸相の態度 連合国宛通告文の発電 陸軍の希望条件伝達方依頼

5 機密戦争日誌

..... 941

第十一篇 終戦

第一章 停戦

..... 944

1 承認必謹

..... 944

外地軍和平交渉を知る 外地軍の強硬意見 パーンス回答に対する外地軍の憤激 狂瀾瞬時にして風ぐ 終戦詔書の玉音放送——八月十五日正午 現地軍の承認必謹 内閣の更迭——宮内閣成立 鈴木首相の放送 陸海軍に対する勅語下賜 御名代宮殿下の特派 宮城事件——森師団長兇弾に墮る 厚木海軍航空隊事件 阿南大將等の自決 安達第十八軍司令官の遺書 敗戦責任に殉じた人々

2 大本營の停戦指導

..... 952

積極進攻作戦中止命令 停戦の大命——八月十六日午後四時 バラオ地区集団長の心境 局地停戦交渉開始に関する指令 ソ軍の暴戻と大本營の措置 中国方面武装解除に対する憂慮 一切の武力行使停止命令 詔誓

渙發以後は俘虜と認めず

3 復員の開始

復員方針の決定 帝國陸軍復員要領の發令 外地部隊復員に対する苦慮 一部特別復員の実施 日本陸軍の象徵軍旗の奉焼 陸海軍人に告別の勅語下賜 軍需用物資資材の緊急処分と焚書 緊急処分の中止とこれが回収

955

第二章 降伏

1 連合軍の進駐

河辺全権のマニラ派遣 河辺全権の折衝 進駐三日延期 進駐受入態勢の整備 皮肉な颶風 マ元帥進駐メルボルンから東京まで

959

2 降伏調印

ミズーリ艦上の降伏調印 九月二日 降伏に関する詔書 天皇布告文 降伏文書と一般命令第一号 陸海軍の降伏命令 大陸命令第一号

961

3 本格的復員の開始

日本陸海軍の終幕 十一月三十日 外地からの引揚げ及び復員

964

第三章 対ソ方面部隊の終戦

1 対ソ戦の開始

ソ軍侵攻前の状態 ソ軍の急襲 九日午前零時 大本營の処置

966

2 関東軍の対ソ作戦

穆稜、掖河の激戦 第五軍主力 国境陣地の奮戦 虎

967

頭、東寧 羅子溝及び大喊廠方面 図們、佳木斯方面

北正面 黒竜江方面 西北正面 海拉爾、第四軍主力

第三方面軍の企図変更 西、中部作戦 西正面と満洲

中部の状況 第二航空軍の戦闘 北鮮方面 羅津、羅

南附近

3 関東軍の終戦

最後の幕僚會議 聖旨奉戴に決す 関東軍の最後 ソ軍の無統制 在留邦人の悲運 満洲国の末路 悲劇の溥儀皇帝

971

4 樺太、千島方面の対ソ戦及び終戦

樺太方面 我が勇戦とソ軍の暴状 千島方面 占守島の戦闘と将兵の運命

973

5 シベリア抑留と引揚げ

運命のシベリア行 作業大隊及び收容所 異国の丘 引揚げ 終了は宣告されたか?

976

第四章 外地部隊の終戦

主戦場より脱走せる外地各方面の概況 不屈の闘魂と承認必謹

978

一 中国方面部隊

ソ連の参戦 停戦 重慶、延安の相剋 蒙疆、熱河方面 ソ軍との局地停戦 南京における降伏調印 連戦満八年

979

二 フィリピン方面部隊

1 ルソン島の持久作戦

サラクサク峠の激闘 バギオの放棄 パレテ峠戦線の破綻 方面軍主力最後の復郭陣地 振武、建武阿

982

980

集團の抗戦 終戦—山下大将下山、降伏

2 レイテ敗戦後の中南部比島部隊 986

その後のレイテ島—軍司令官戦死 ミンダナオ島の作戦 その他諸島の作戦 終戦—各個に降伏

3 ビルマ方面部隊 988

ビヨベ戦線の崩壊 全線崩壊—ラングーン陥つ 第二十八軍の孤立—宮崎兵団の行動 シッターン戦線の構成—マレー防衛 第二十八軍の脱出作戦 終戦時の状況—刀折れ矢尽く

4 その他の南西方面部隊 993

1 南方軍の作戦指導及び終戦 993

南方軍作戦計画の更改 タイ、仏印方面作戦準備の強化 シンガポール周辺の戦備強化 臺北方面の態勢整理 南方航空の主力台湾へ 南方軍の停戦 代板垣大将 マウントバッテン元帥に降伏調印

2 各地部隊の作戦及び終戦 997

タイ、仏印地区 マレー、ジャワ、スマトラ地区
ボルネオ地区 悲惨、臺北地区—イドレの転進

5 南東及び中部太平洋方面部隊 1000

濠軍との惨烈な戦闘

1 東部ニューギニア方面 1000

濠軍の来攻 第十八軍の奮戦—原住民の協力 第十八軍の終局迫る 終戦—一四万から一万三千へ

2 ラバウル及びボーゲンビル島方面 1002

濠軍の来攻 第八方面軍司令官の精神 第十七軍の奮戦 終戦—濠巡洋艦上にて降伏調印

3 中部太平洋方面部隊 1005

取残された部隊の降伏

六 引揚げ及び復員 1006

1 概況 1006

終戦時の外地日本陸海軍 軍隊及び邦人の管理区分 武装解除及び集團引揚げの状況

2 中国軍管区 1008

国共相剋による苦難 山西の閻錫山に降伏した第一軍

3 東南アジア軍管区—英軍管区 1009

総司令部シンガポールに移動—寺内元帥病歿 安南暴動及びインドネシア独立運動に関する紛争 作業隊の残留問題

4 濠軍管区と米軍管区 1010

第五章 占領下の日本 1010

1 占領統治の機構 1011

占領統治の主動権 軍政の態様・方式

2 占領政策 1012

占領政策の基本原則 軍事的無力化政策 文明の名によつて行われた戦争裁判 占領下における日本の変革 占領政策、混乱と飢餓とを救う

3 戦禍、失われたるもの 1016

国土の喪失 人の損害 物の損害 嵐の中の日本
あとがき 1019

大東亜戦争重要史実一覧表

(自一九四〇・七一至一九四五・十一)

1023

余録

編集余聞

所懐の一端

刊行のことば

1073

別冊・附図附表目次

附図第一

大東亜戦争作戦地域一般図

昭和十六年十二月一日に於ける全般態勢図

附図第二

南方全般攻略作戦経過要図

馬來攻略作戦経過要図

シンガポール攻略経過図

比島攻略作戦経過要図

第二次バタアン半島攻略戦

附図第三

ビルマ攻略作戦経過要図

ビルマ方面彼我の態勢要図

第一次アキヤブ作戦要図

附図第四

ジノノ攻略作戦経過要図

ジャワ本島作戦経過要図

附図第五

南東方面彼我航空態勢及び八十一号作戦経過図

中部及南東太平洋方面一般図

附図第六

ウ号を中心とする作戦計画並に実施要図

北緬方面の作戦経過要図

附図第七

大陸打通作戦経過要図

イラワチ河畔の会戦要図

附図第八

硫黄島作戦経過図

附図第九

本土防衛前線作戦と本土を繞る彼我戦略態勢図

沖縄作戦経過図

附図第十

本土地上兵力配備要図

関東方面地上決戦構想要図

九州決戦構想要図

有明湾方面配備要図

附図第十一

満洲方面対ソ作戦経過概見図

終戦時に於ける日本軍の態勢概見図

附表第一

大東亞戰爭關係歴代内閣一覽表

附表第二

陸軍省及び大本營陸軍部主要職員在職期間一覽表

(自昭和十五年六月—至終戰時)

附表第三

海軍省及び大本營海軍部主要職員在職期間一覽表

(自昭和十五年六月—至終戰時)

附表第四 (其の一) (其の二)

終戰時における陸海軍主要部隊概見表